昭和48年5月1日発行（毎月1回1日発行）第22巻・第6号 昭和29年6月23日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号 昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

ユンカース
シュツーカ



☆特集☆
GD/F-111可変翼機の問題点を探る
岩国基地の新明和 PS-1 対潜飛行艇
09用初級シングルR/C機ホークアイ

'73 MAY 5

$3.00

海上自衛隊のPS-1対潜飛行艇





SHINMEIWA/JMSDF PS-1 ANTI-SUBMARINE FLYING-BOAT



海上自衛隊の対潜飛行艇PS-1は，これまでに9号機が完成しており，全機が岩国基地に送られ，下総の第51航空隊の派遣隊と，岩国基地で新しく発足することになった第31航空隊の手で運用テストがつづけられている。
前ページとこのページは，このほど岩国基地で撮影した4号機と5号機．まもなく搭載している対潜機器などを使っての戦術テストも始められることになっている。





ベトナムから帰ったスカイホーク

F-4E SKYHAWKs of VMA-211 & VMA-311 at MCAS Iwakuni.



ベトナム戦の停戦とともに，南ベトナムのビェンホアから岩国に帰ってきた第12海兵航空大隊傘下のA-4Eスカイホーク。第211海兵攻撃飛行隊（VMA-211）と第311海兵攻撃飛行隊（VMA-311）両飛行隊のA-4E 約30機は，1月30日に全機が岩国基地に顔をそろえた。

写真は2月初めに撮影したもので，左ページはVMA-211の所属機，下はVMA-311の指揮官機である。





前ページと同じく岩国基地のA-4Eスカイホーク。VMA-311“トムキャッツ”部隊の所属機。

タクリ空軍基地のF-111A



F-111As of the 474th TFW assigned to Takli Royal Thai AFB, Thailand.

昨年9月末にネリス空軍基地からタイ国のタクリ空軍基地に展開した第474戦術戦闘航空団のF-111A。同基地で待機するラインアップ。



同じくタクリ基地のF-111A。写真上は夕刻せまるフライトライン。写真下はF-111Aの主翼下に装備される750ポンド爆弾。6発をまとめたマルチプル・エジェクター・ラックを車から降してF-111に装備するところである。





出撃準備中のF-111Aの1機。整備員が胴体にもぐって主脚の安全ピンをはずしているところ。写真下はいよいよ発進。整備員の誘導で滑走路に向う。前後縁フラップ，主翼取付部カバーなどの動きに注意。





F-14Aトムキャットの飛行テスト



[illegible]


XE
NAVY
OPERATIONAL TEST AND EVALUATION FORCE
VX-5
12



ワシントンのアンドリュウス基地に飛来した各機。前ページは海軍の運用テスト評価部隊VX-5のTA-4Jスカイホーク。上はA-4Mスカイホークで，第331海兵攻撃飛行隊（VMA-331）の所属機。下はEKA-3Bスカイウォーリアで，第15空母攻撃航空団（CVW-15）第135戦術電子飛行隊（VAQ-135）第3派遣隊の所属である。

（Photos by Dr. J. G. Handelman）





リノの第8回エアレースから（続）

ネバダ州リノの第8回エア・レースの参加機。〔上〕これもT-6テキサンの改造機。こんな塗装にすると，重い機，どん重で知られるテキサンも，さっそうとして見えるからふしぎだ。〔下〕曲技飛行なども見せた"エクスペリメンタル・エアクラフト・アソシエーション" 所属の1機。
(Photos by R. Monroe)





レベル総代理店
グンゼ産業(株)物資部
東京都千代田区神田錦町3－17
TEL 294－4141代
Revell
原料が違う最高品質
レベルカラー
★君はどのモデルに
挑戦しますか!!
アタック
第4回プラ・プレーンコンテストがはじまっています。君は、レベルのどのモデルで挑戦しますか。話題の傑作機から最新のキットまでズラリと18機種。気に入った1機を細部まで凝って作るのもヨシ、数でこなすのもよし…君の自信作でPPC'73に応募してください。
●くわしくは、お近くの模型店でおたずねください。
PPC'73レベル課題機18
1/72 空技廠 陸爆"銀河"
〃 B-17F 空飛ぶ要塞
〃 ブルーエンジェルス
1/32 ムスタングIII
〃 メッサー Me109F
〃 三菱A6M5"零戦"
1/32 F4F-4ワイルドキャット
〃 P-40E タイガー
〃 スピットファイアー
〃 フォッケFw190D
〃 メッサーMe262A
〃 川崎三式戦"飛燕"
1/32 三菱J2M3"雷電"
〃 Ju-87B スツーカ
〃 ホーカーハリケーン
〃 F4U-1 コルセア
〃 モスキート
〃 F-4J ファントム



〔上〕これもアメリカの曲技飛行チーム"エクスペリメンタル・エアクラフト・アソシエション"の1機。同チームは1970年曲技飛行世界選手権大会で優勝している。〔下〕変ったかたちのホームビルト レーシング複葉機"マホニイ・ソーサレス"。全金属製で，ライカミングO-290-3エンジン（125HP）装備。水平速度最大325km/hという。　(Photos by R. Monroe)



マーテル・ミサイルを装備したハリアー

両主翼下に空対地ミサイルAS. 37マーテルを装備して飛行訓練中の英空軍のハリアーGR.1。フランスのマトラ社がホーカーシドレー・ダイナミックスと共同で製作しているマーテル・ミサイルは全長4.26m，胴体の直径約0.39mで，フインの幅は1.16m。レーダー誘導方式だが，ホーカーではテレビ誘導方式のものも開発している。写真の機体に吊されているのはレーダー誘導方式のもの。





前ページと同じくマーテル・ミサイルを装備したハリアーGR.1。英空軍が装備するハリアー

ており、1号機が部隊に引渡されたのは4年前の1969年4月、ウイットリングの第1スコード



AAMで武装した F-4EJ ファントム

The 4th machine of the F-4EJ on runway at JASDF Hyakuri Air Base with mixed external weapons load of four Falcon and Sparrow AAMs.

ミサイル装備の訓練を開始した航空自衛隊のF-4EJの4号機。写真では主翼の内側パイロンにファルコンAAMを4発，胴体下に4発のスパローAAMを半埋込み式に装備している。2月初め，百里基地にて。 (Photos by K. Tokunaga)





厚木基地に飛来したEA-6B

The Grumman EA-6B of VAQ-131 is shown its landing at Atsugi Naval Air Station.

2月初めに厚木基地へ飛来した4座の電子偵察機EA-6B。本誌3月号で紹介した原子力空母エンタープライズ（CVAN-65）に配属されている第131戦術電子戦飛行隊（VAQ-131）の所属機である。

(Photos by S. Ohtaki)





ソ連の第一線旅客機

〔上〕欧州一の設備を誇るドモデドボ空港整備センター格納庫内のIl-62。手前はアエロフロート，向う側は東ドイツのインテルフルークの装備機である。〔下〕モスクワ空港に着陸するTu-154。このほどシェリアビンスクーモスクワ間に就航した同機の1番機。
(Photos by TASS)





ソ連の第一線旅客機

〔上〕欧州一の設備を誇るドモデドボ空港整備センター格納庫内のIl-62。手前はアエロフロート，向う側は東ドイツのインテルフルークの装備機である。〔下〕モスクワ空港に着陸するTu-154。このほどシェリアビンスク－モスクワ間に就航した同機の1番機。
(Photos by TASS)





編隊で飛ぶ A-300B 原型 1，2号機

A-300B の原型 2 号機が完成，2 月 5 日から 1 号機とともに飛行テストに参加した。写真はフランスの山岳地帯上空を編隊飛行する 1 号機（手前）と 2 号機。A-300B は明年初めからエアラインへの引渡しが開始され，路線に就航する計画である。

ヨーロッパへのトライスター１号機

イギリスのチャーター航空会社コートラインが発注していたL-1011トライスターがこのほどカリフォルニア州パームデールで飛行した。コートラインでは“ハルシオン・デイズ”(平穏な時代)の愛称をつけて，4月から欧州最大の旅行社クラークソンズ・ホリディと協力して同機の運航を開始する。



ＢＥＡのトライデント２Ｅと ユニークな水陸両用機 X-191

〔上〕ブリティッシュ・ヨーロピアン・エアウェイズ(BEA)が1968年４月から就役させているトライデント２Ｅ。同航空ではトライデントが主力機で，現在この２Ｅを14機のほか，１を24機，３Ｂを19機装備している。

〔下〕いま専門家のあいだで話題になっているアイスランドX-191水陸両用機。スマートな単発２人乗りの機体で，設計したのはグラマン社に勤めた技術者のロイ・Ｐ・ロプレステ氏。すでにこの機体には相当の自信をもっているらしく，フロリダにアイスランド航空機という会社を設立して自から社長となっている。機体がユニークで高性能なうえ，値段も安くなりそうで，市販を待ち望む声が高い。





岩国のPS-1飛行艇



Shinmeiwa PS-1 Anti-submarine Flying-boats during evaluation trials at the Iwakuni JMSDF station.



海上自衛隊のＰＳ-1対潜飛行艇は、９号機まで完成、今年の３月から発足した岩国の第31航空群第31航空隊に配備されて、運用テストを続行中。まもなく対潜機器の能力などをためす戦術運用テストに入ることになっている。３次防までの生産分14機のＰＳ-1が顔をそろえるのは来年春、４次防でさらに９機、ＰＳ-1改３機の生産が決っている。写真はこのほど岩国で撮影した飛行テストの模様。



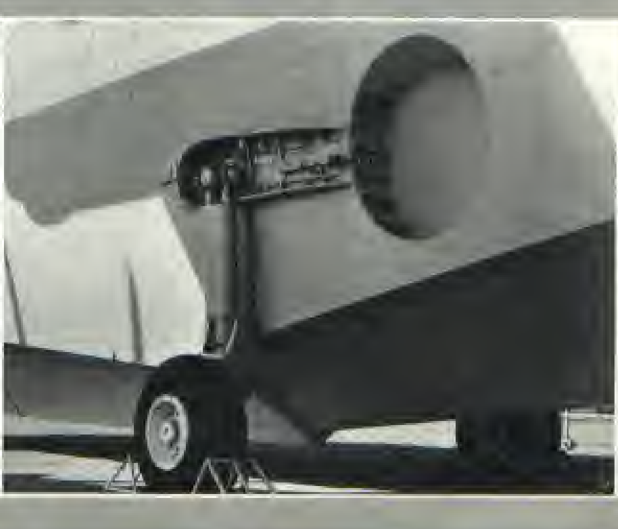




いま世界で実用化されている飛行艇は、軍用型ではグラマン・アルバトロスとソ連のBe12の二つ。民間型では消防用飛行艇カナデアCL-215が主なところ。アルバトロスはもはや老旧機、PS-1と同じく対潜哨戒機として使っているターボプロップ双発のBe12にしても、すでに10年以上も前に就役した老兵。飛行艇の分野でただ一つ、新鋭機として開発が続けられている4発の大型飛行艇PS-1は、世界の注目を集めている。

43ページは離水する5号機。海上はおだやかだが、本機独得の波消し装置が、飛沫を小さく押えていることがわかる。写真左上は4号機の尾部。この後方に磁探ブームを突き出して哨戒する。上はランプに並んだ4号機と5号機。下はビーチング・ギアで、左が前輪、右が主輪。PS-1改では、これが本格的な離着陸用の車輪にかえられる。









上と下は飛行テストを終って水洗い。上の写真でエンジン・ナセルの外側に吊してあるのはサーチライト、その外翼下面には着陸灯があり、両方とも右翼のみに装備している。下の写真では、艇首の2重になった波の吸収機構がよくわかる。





上と下は，飛行を終えて自力で滑り台を上る3号機。補助フロートの外側の主翼には，片翼に3発ずつ127mm航空機用ロケット弾改を装備するが，下の写真でその懸吊装置がよくわかる。





上は離水場に向う5号機。PS-1は高揚力装置として、吹出し式のBLC（境界層制御）装置を採用しており、主翼後方の胴体上部にその動力用エンジン（GE T58-1HI-10M1）を積んでいる。上の写真では主翼付根ふきんに、その排気口が見える。下は4本の支柱で支えられた4号機の補助フロート。





上は4号機の右主翼。エンジンはGE T64-1HI-10（2,850ehp）4基。両エンジン・ナセル間に見えるのは魚雷ポッドで、このなかに短魚雷を2基装備する。魚雷ポッドは両主翼下に装備。写真ではポッドの扉が開かれているのに注意。探知した潜水艦を攻撃するのは、この魚雷と127mmロケット弾。

写真下は、エンジンのテスト中。



岩国基地のスカイホーク



A-4 SKYHAWKS RETURNED TO IWAKUNI AIR STATION





ベトナム停戦とともに、ホームベースである岩国航空基地に帰ってきた第12海兵航空大隊（MAG-12）のA-4Eスカイホーク。これは去る1月末、岩国に到着したMAG-12れい下の第211海兵攻撃飛行隊(VMA-211)と第311海兵攻撃飛行隊(VMA-311)の各機である。

両飛行隊は、昨年4月から再開された北爆にそなえて南ベトナムのビエンホア基地に展開して作戦中であったもの。地上要員を含めて2個飛行隊約600名の移動は、C-141輸送機などを使って行なわれ、A-4Eスカイホークも順次岩国に帰った。10日間の予定であった人員機材の移動が、半分の5日間で終了するというすみやかな移駐であったという。岩国に帰ったMAG-12は、これから平和時の編成替えにそなえることになる。

（前ページと上・右上）CFのテイル・レターをつけたVMA-211"ウェーキ・アイランド・アベンジャーズ"のA-4E。胴体には赤いライオンを画いている。機体の前は、車輪のついたエンジン起動車。

（下・下右）WLのテイル・レターのVMA-311"トムキャッツ"のA-4E。胴体にはキャットの漫画。下の機体の機首には、戦車撃破のマークをつけている。






CF
9661
MARINES
22


WL
0105
MARINES



このページも同じくVMA-311所属のA-4Eスカイホーク。A-4EはC型の性能向上型で、エンジンを推力の大きなものとし、電子機器も増強され、爆弾搭載量も大はばに増えている。これまでに499機が生産されており、最近は写真の機体のように、操縦席後方にF型と同じ電子装備のふくらみをつけたものに改造されている。
写真では機首の"RESCUE"のところに"救助"という日本文字が見えるが、海兵隊では、ここのところは駐留地の言葉で書くのを慣例としている。



ソ連民間機の整備場風景





定期旅客機の安全な運航を支えるのにもっとも重要なな役割りを果しているのは整備補給。しかしこの縁の下の力持ち，エアライナーの派手な飛行のかげにかくれて，あまり陽をあてられることがない。今回はソ連の民間航空機の"休養所"整備補給工場にスポットをあててみよう。

写真左はドモデドボ空港内の整備工場。Il62の尾翼を整備中。ドモデドボの整備センターは，同空港を利用するあらゆる飛行機の機体やエンジンのオーバーホール，装備部品の整備改修を行なっており，施設はヨーロッパ最大という。写真上はソ連西部の都市ミンスクにあるミンスク飛行機整備工場内の模様で，アセンブリ・ライン上のTu124。 (Photos by TASS)



写真上と下もミンスク飛行機整備工場。ここではハンガリー、ブルガリア、ポーランドなど衛星各国の航空会社で使っているYak-40、Iℓ-14、Tu-124、Tu-134などの整備やオーバーホールを行なっているほか、Tu-124、Tu-134の最終組立ても行なっている。

写真はTu-124とTu-134のアセンブリー・ラインで、写真上では左手にTu-134、右にTu-124の1機が見える。写真下も同じく最終組立て中のTu-124（左）とTu-134。

(Photos by TASS)







写真右と下はミンスク飛行機整備工場の屋外テスト場。整備を終えた各機や最終組立てを終って完成した機体は、ここで最終点検を受け、テスト飛行に入る。
写真はTu-124から発達した中距離旅客機Tu-134A。機首をガラス張りの航法士席にして、下面にレドームを張り出した初期の頃のもの。最近のTu-134Aは、ガラス張りのところにレドームを収めたものとなっている。乗客は76－80人乗り。



スナップ だより



（上）このほど横田基地に飛来したF-4DファントムII。UPレターをつけた第3戦術戦闘連隊（3rd TFW）の所属機で、同連隊の司令官機である。（昭島市・桜田繁）

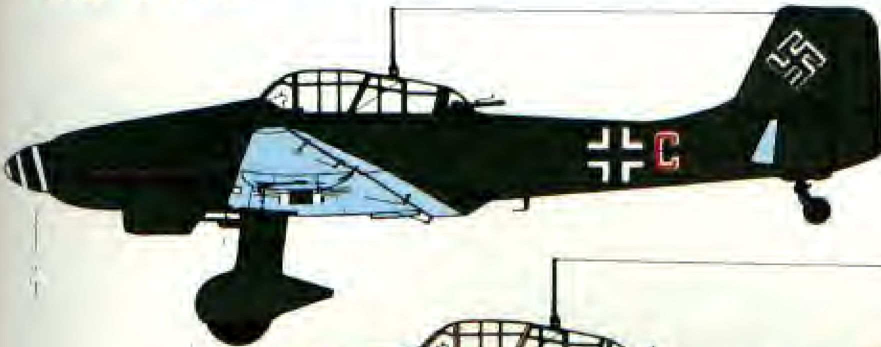


（上）昨年夏に沖縄の嘉手納基地で撮影したB-52G。この機体は昨年末に北ベトナムで撃墜されたと公表されたB-52の1機であり、シリアルは80201。（西宮市・浜野博司）

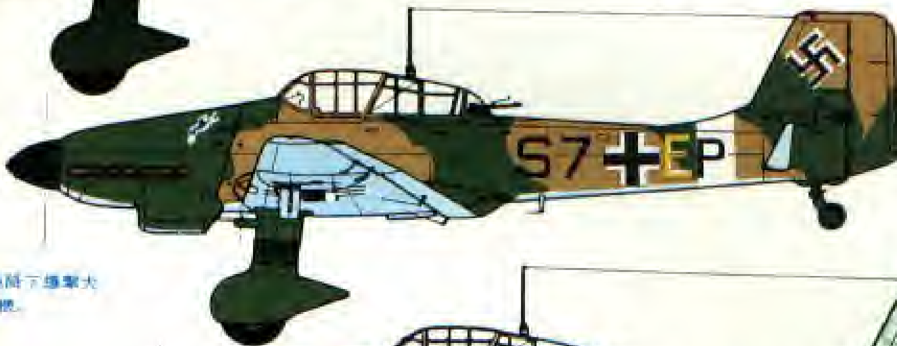
（下）フランスのTAT航空へ売却された全日空のF27フレンドシップ8機のうち1機（JA8622）。2月14日、大阪国際空港にて。（仙台市・小山信夫）



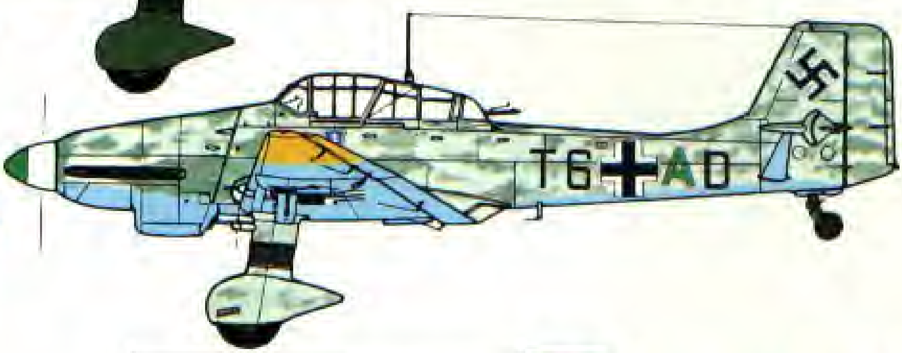
JUNKERS JU87D~G STUKA



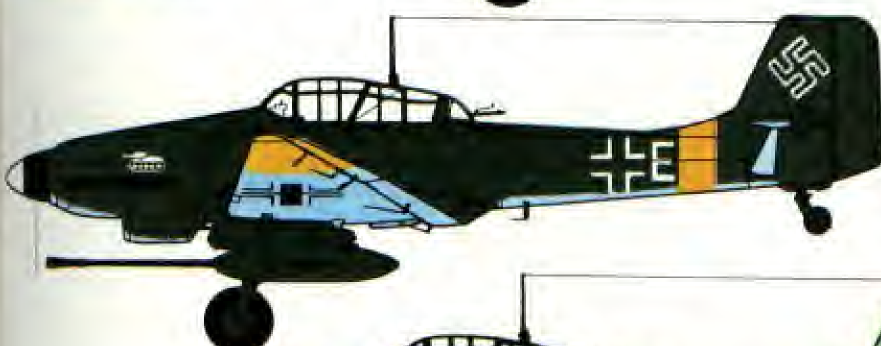
① Ju87D-7。第1（夜間）攻撃大隊第2小隊所属機。
2/NSG1



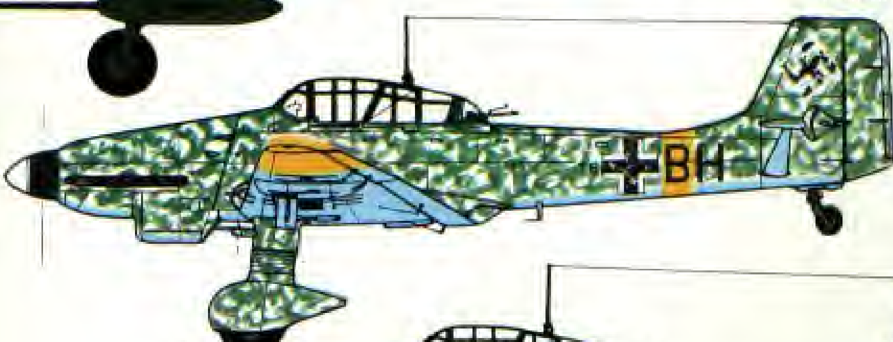
② Ju87D-1。第3急降下爆撃大隊第2中隊所属機。
II/St G3



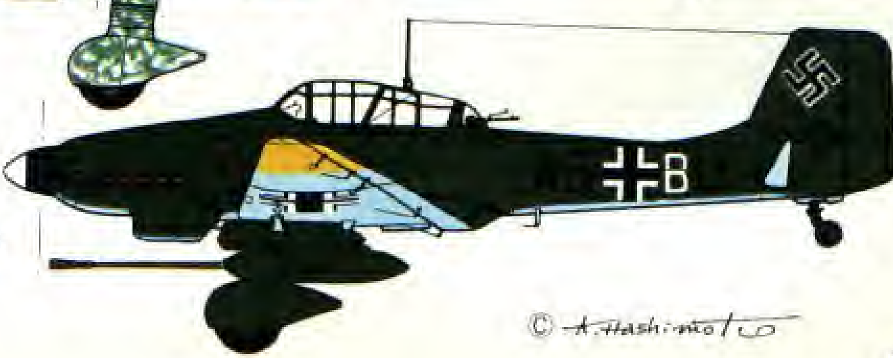
③ Ju87D-5。第2地上攻撃大隊第3中隊所属機。大隊司令官ハンス・ルデル大佐の乗機。
Flown by Obst. Hans-Ulrich Rudel Gruppen Kommandeur of III/SG2.



④ Ju87G-1。第1地上攻撃大隊第10戦車攻撃小隊機。
10（Pz）/SG1



⑤ Ju87D-3。第2急降下爆撃大隊第1中隊所属機。
1/StG2 "Immelmann"



⑥ Ju87G-1。第1急降下爆撃大隊第10戦車攻撃小隊機。
10（Pz）/St G1

© A. Hashimoto

グラマンF6F ヘルキャット

〔右〕空母ヨークタウン(CV-10)から発進して進撃する第5戦闘中隊(VF-5)のF6F-3。同中隊のF6F-3は，1943年8月31日，第15機動部隊の一翼をになって，マリアナのマーカス島(南鳥島)攻撃に初出動している。写真は同年9月の撮影。水平尾翼の白線が部隊標識。

〔下〕空母エセックス(CV-9)号上の第15航空大隊の各機。リフト上は，第15戦闘中隊(VF-15)のF6F-5，右に第15爆撃中隊(VB-15)のSB2C-1ヘルダイバー，その後方に第15雷撃中隊(VT-15)のTBF-1アベンジャーが見える。1944年10月21日の撮影で，レイテ湾海戦のころ。

(USN/National Archives)



Archives.)





GRUMMAN F6F-3 HELLCAT



空母ヨークタウンで発進準備中のF6F-3ヘルキャット。第5戦闘中隊の所属機で、前方の機体は第5空母航空群の司令官ジェームス・フラットレイ中佐の乗機である。1943年秋の撮影である。


59

〔上〕火災が発生した空母サラトガ（CV-3）。山形の部隊標識をつけたのは、第53夜間戦闘中隊（VF(N)-53）のF6F-5Nで、同中隊は1945年の1月16日から3月6日まで同艦に配属されて戦闘出撃している。写真は2月21日、硫黄島沖で作戦中のもの。主翼の部隊標識は右翼上面のみ。

〔下〕空母ランドルフ（CV-15）艦上のF6F-5。第16戦闘中隊（VF-16）の所属機で、同中隊は1945年の6月17日から終戦まで同艦に配属された。L字のマークが部隊標識で、これは左翼下面にもつけていた。終戦まぢかの8月の撮影。 (USN/National Archives)







空母ヨークタウン（CV-10）号上の第5空母航空群(CVG-5)機。手前にF6F-3ヘルキャット，後方にはSBDドーントレスが並んでいる。



〔右〕発進する海兵隊のF6F-5N。1945年5月10日沖縄沖で作戦中のシーンで，カタパルト・オフィサーは野球のアンパイアのような動作機首に"ハンガー・クイーン"のニック・ネーム。これは事故で週に何度も引返したため命名されたものという。(USMC Photo)



ハイモデリングのための
レベル資料集

F-4 ファントムII

〔上〕第33戦闘飛行隊（VF-33）のF-4J。VF-33"フェリックス"は，第102戦闘飛行隊（VF-102）とともに空母アメリカに配属され，F-4JでベトナムМ戦を闘った最初の部隊である。写真はパリで展示されたときのもの。

〔下〕太平洋艦隊の訓練部隊である第101戦闘飛行隊（VF-101）のF-4J。同飛行隊はF-4Bとの混成で50機以上を装備して乗員の訓練にあたっている。オシアナ基地で撮影。

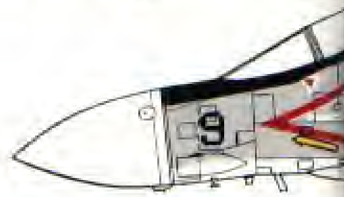




① F-4J，空母アメリカ搭載，第74戦闘飛行隊所属機
VF-74, CVA-66 America



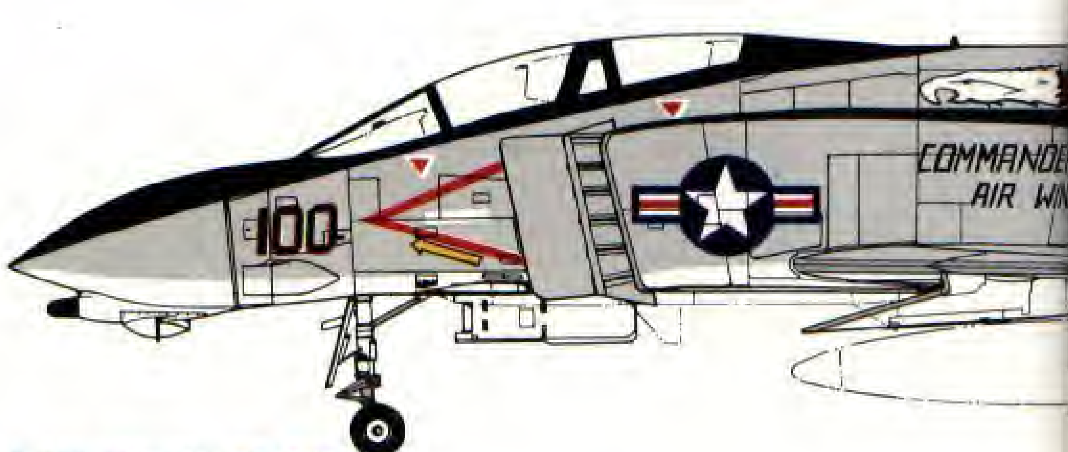
② F-4J，第4実験開発飛行隊所属機
VX-4



③ F-4J，第251海兵戦闘攻撃飛行隊"レッドライトニング"所属機
VMFA-251 "Red Lightning"

McDONNELL DOUGLAS F-4B～J PHANTOM II

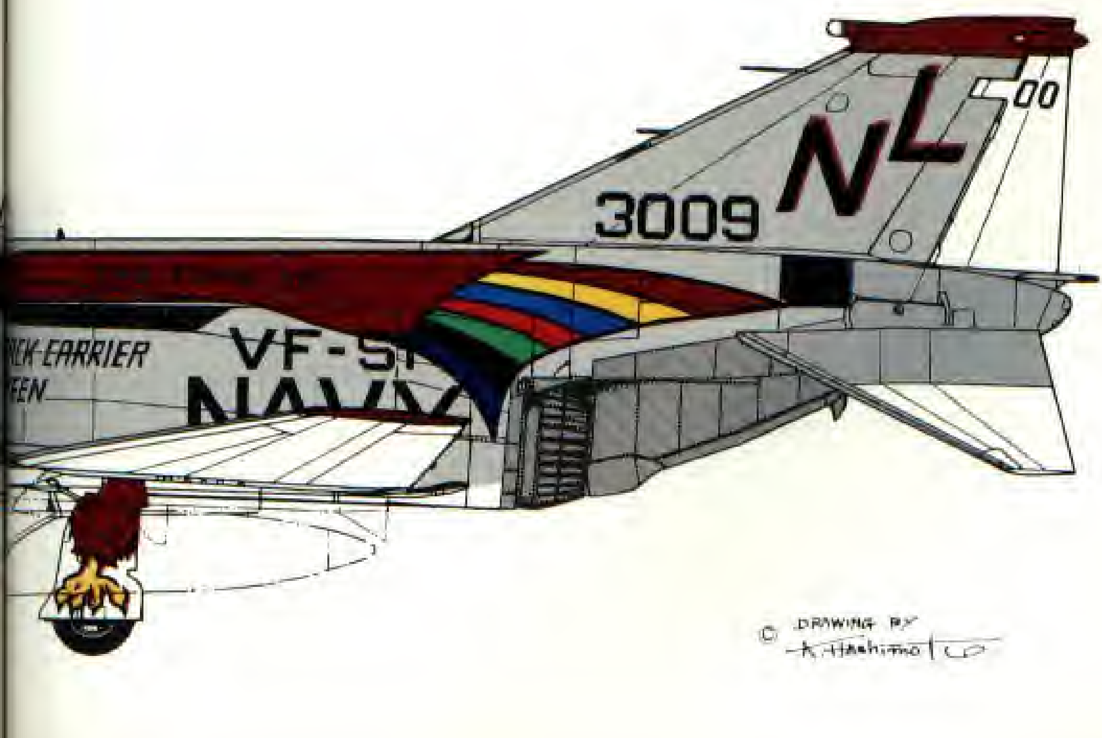
1/32 SCALE KIT



④ F-4B，空母コーラルシー搭載，第51戦闘飛行隊，第15空母攻撃航空団司令官機
VF-51, commander of CVW-15, CVA-43 Coral Sea

原料が違う高品質
レベルカラー





© DRAWING BY
K. Hashimoto

ハイモデリングのための
レベル資料集

マクダネル／ダグラス F-4J ファントム II

McDONNELL DOUGLAS F-4J PHANTOM II

☆キットについて☆

現在プラ・プレーン・キット界で話題の中心となっているレベルの1/32スケール超大型モデルは，これまた史上最初（？）ともいえる超精密ビッグサイズのデカール付で発売中。

実機の取扱い説明書から直接縮小して印刷された各部の注意書き文字のデカールが圧巻で，空母ルーズベルト搭載のVF-84"ジョリーロジャース"と空母レンジャー搭載VF-154の第2司令官機のほか空母アメリカ搭載VF-33の3種の戦隊マークが附属している。デカールの大きさは38cm×18cmのもの1枚と38cm×13.5cm 1枚の2枚入り，モデルは全長が55.2cmもあるビッグサイズ。実機のイメージを忠実に再現した豪華版。

☆塗装について☆

図①③と④の機体はスタンダードの塗装で機体の上・側面がガルグレイ⑪，下面白①の塗装，各翼前縁とエア・インテーク前縁はシルバー⑧に少量のガルグレーを混色。尾部のジェット可変ノズルと尾部下部は焼鉄色㉘＋㊶で塗り，水平尾翼内半分と尾部をシルバーに塗装。機首はややフラットな白にしたほうが引立つ。

図①は主翼と胴体のウォークウェイがダークガルグレイ⑬＋⑪，矢のマークは赤③で黒ふちつきとなっている。翼端上下は赤。

図②　機体全面がつやのある黒であるが実機は空の青を反射して少し青黒く見える場合が多いから黒②＋ブルー⑤で塗装，機首光線反射よけとウォークウェイは黒の半つや消し㉝に塗る。

図③　図①と同ようの塗装でウォークウエイはダークガルグレイ。胴体のマークは垂直尾翼と同ようの白い十字に赤い電光である。

図④　塗装は図①③と同じで，キャノピの枠と機首上部は黒，ワシのマークと垂直尾翼上部と主翼翼端上下はレッドブラウン③＋⑦。ウオークウエイは黒，誰でも一度は作ってみたいような派手なマーキングのF-4Jである。　　　　（K.Hashimoto）

データ（F-4J technical data）

全幅（span）11.76m，全長（length）17.79m，全高（height）4.99m，最大重量（gross weight）26,300kg，発動機（power plant）J79-GE-10（5,380kgst，8,120kgst with afterburning）×2，最大速度（max speed）M.2.2～2.4（12,200m），最大航続距離（ferry range）2,000nm，戦闘行動半径（combat radius）350～700nm，乗員（crew）2。

KIT:

The Revell 1/32 scale F-4J Phantom II 'Now on sale' with extremely minute and grand decals is winning sweeping popularity of plastic plane kit fans. Letterings of "notices" on each part of the plane have carefully been picked up and directly recopied from the operational manual of the real plane. So accurate ever appeared in the plane kit history. Attached to this large model, 55.2 cm in length, are three different fighter squadron marks, VF-84 "Jolly Rogers" of USS ROSEVELT, VF-154 CVW-2 of USS RANGER and VF-33 of USS AMERICA. One decal is as large as 38×18 cm and the other two are 38×13.5 cm in size. No one disputes about the grogeousness of the kit faithfully revived the image of the real heavy fighter.

PAINTING:

Those of Figs 1, 3 and 4 are in a standard painting with Revell Color (RC) 11, gull gray on the top and sides of the plane. RC 28 plus 41, burned iron, is for the jet changable nozzle in the tail part and the bottom part of the tail. The tail except the half of the horizontal tail are silver. A flat white painting for the nose will enhance the beauty of the plane.

Fig. 1. The main wings and the walk-way of the fuselage are RC 13 plus 11, dark gull gray. The arrow mark is RC 3, red, hemmed in black. The wing edges, both upper and lower sides, are red.

Fig. 2. The real plane is painted totally in black, but it looks very often to be blue black, due to a reflected light of the sky's blue. Therefore, RC 2, black plus RC 5, blue is recommendable for this plane, except for the nose anti-refection device and the walk-way which are to be painted RC 33, non-glare black.

Fig. 3. Similar to Fig. 1 with walk-way in dark gull gray. The fuselage mark, like that of the vertical tail, are a combination of white cross and red lightning.

Fig. 4. The overall painting is similar to that of Figs 1 and 3, with showy markings which will never fail to incite an appetite of every kit plane fans.　　　　(K. Hashimoto)

F-4の塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	②ブラック
③レッド	⑤ブルー
⑦ブラウン	⑧シルバー
⑪ガルグレイ	⑬ニュートラルグレイ
㉘黒鉄色	㉝黒つや消し
㉞スカイブルー	㊷レッドブラウン



ハイモデリングのための

レベル資料集

〔上・下〕第11戦闘飛行隊（VF-11）"レッド・ライパーズ"のF-4B。同飛行隊は1927年2月1日の編成以来，第17空母攻撃航空団（CVW-17）に所属し，空母フォレスタルに積まれて第6艦隊に派遣されている。主翼端と垂直尾翼先端を赤く塗り，イノシシの頭と楯の部隊エンブレムである。オシアナ基地で撮影。





F-4Jファントム II、ビューフォートを基地としている海兵第251海兵戦闘攻撃飛行隊(VMFA-251)の所属機である。(Photo by R. Lugk)



JU87 シュツーカ



ぶかっこうな逆ガルの主翼、歯をむき出した口のようなラジエーター・バス、猛きんのつめを思わせるがん丈な主脚。みにくさではこれ以上のものがない容姿の"怪鳥"Ju87シュツーカ。それが悪魔的な不思議な機能美を持ちあわせているのは現在のファントムIIに似ている。

シュツーカは、大戦開戦とともヒットラーの巧みな宣伝によって、世界中にその名をはせた。緒戦のドイツ軍の電撃作戦は、ぶきみなサイレンを響かせて逆落し、目標に的確に襲いかかる本機の働きに負うところが大きい。しかし低速で運動性がにぶかった本機は、ひとたび守勢にたつと驚くほどもろかった。シュツーカがバタバタ落されるときそれはドイツ軍の落日でもあった。シュツーカは大戦前半を思いっきり暴れまわって、ヒットラーと運命をともにした。

〔前ページ〕ルーマニア空軍に供与されたJn87B-2。同空軍は1940年に、各9機装備の3個中隊を編成して、翌年から実動態勢に入っている。

〔上〕Ju87B-1。最初の量産型Ju87A型のエンジンをユモ211Da（離昇1,200HP）に換装、翼と胴体以外を再設計して性能の向上をはかったのがB-1。1938年10月に、5機がスペインのコンドル部隊に送られ、好成績をあげている。

〔下〕Ju87B-2。B-1につづいて1939年末に造られたのがB-2。推力排気管つきとなり、プロペラも幅の広いものとなった。単座の場合、最大2,205ℓbの爆弾を装備できた。







〔上・下〕イタリア空軍のＪu87Ｒ。Ｒ型はＢ-2の航続力をのばした対潜・長距離型で、翼内の燃料タンクを増やし、両主翼下の爆弾架に66英ガロンの落下タンクが装備できるようにしたもの。このため爆弾の搭載量は最大551lbとなっている。



〔下〕これもイタリア空軍のＪu87Ｂ。イタリア空軍では1940年末に熱帯地用のＢ型を装備、41年初めにかけて、シシリー、アルバニア方面の作戦に投入している。写真の機体は208中隊の所属機である。





〔下〕Ju87D-1。ユモ211J-1（離昇1,400HP）エンジンを積んで、カウリングを再設計、滑油冷却器をカウリングの上から下に移し、風防も流線型に改め、主脚のフェアリングも小さく単純化するなどの改造をしたのがD型。1941年春からB型に代って生産された。写真の機体の胴体と主翼下面に画かれているSE+TXの文字は、社内テスト飛行のときのラジオ・コール記号。



〔下〕Ju87D-3。Trop. エンジン、ラジェター、操縦席の防弾を強化した地上攻撃型がD-3。写真の機体は第3急降下爆撃大隊（St.G3）の1機で、北アフリカ戦線で作戦中。-3は地上攻撃型だが、ダイブ・ブレーキは-1と同じく装備したままであった。





〔上〕オーストリアのウェルズ飛行場で"武装解除"されたドイツ空軍機。Fw190、Ju52、Bf109Gなどにまじって、機首を白く塗ったJu87Dが映っている。1945年5月の撮影。〔下〕第3急降下爆撃大隊（St.G3）のJu87D-5。1943年にデビューしたD-5は、主翼下の装備を増やすために外翼をのばしたもの。途中からダイブ・ブレーキは廃止している。



（下）Ju87D-5。大戦も後半に入ると低速で防御の少ないJu87はつぎつぎに敵戦闘機のえじきになって、敵陣のまっただなかに突っ込む急降下爆撃から対地攻撃支援や夜間攻撃にまわされ、夜間専用のD-7、37mm機関砲装備の戦車攻撃型Gなどが造られた。





昭和16年秋、戦機をはらんで緊迫した情勢下、猛訓練で最後の仕上げをする海軍航空部隊。

（上）戦艦"長門"を仮想敵艦として突っ込む96式陸上攻撃機23型。雷撃する96陸攻に対して"長門"も同時に高角砲でねらいをつけて、対空射撃、そして回避の訓練。双発機による長距離攻撃で敵艦の死命を制し、艦隊決戦を有利に導く。この戦術は開戦初頭、マレー沖海戦の大戦果として結実した。"長門"と反航するのは第3水雷戦隊第20駆逐隊の特型駆逐艦。

（右3枚）真珠湾攻撃にそなえて空母"瑞鶴"への着艦訓練。着艦進入する97式12型艦上攻撃機を順に追ったもので、高度が高すぎて復航。海水で冷却された排煙の水蒸気が、霧のように艦側をつつんでいる。

猛訓練！ 海軍雷撃機

Nakajima B5N2s in landing practice on the flight deck of the aircraft carrier ZUIKAKU, autumn, 1941





［上・右下］同じく訓練中の"長門"と97式12型艦攻。97艦攻は第1航空艦隊の所属。投下された訓練用魚雷の水しぶきが白くあがって、実戦さながら。［下・右上］訓練用魚雷を投下する97艦攻。右上は投下した瞬間。







Nakajima B5N2 carrier-based attack-bombers of First KOKU KANTAI (1st Air Fleet) are shown over a Battleship NAGATO during torpedo attack practice in autumn 1941.





（左）"長門"と1式陸攻23型。1式陸攻は鹿屋航空隊所属機。雷撃を終えて"長門"の上をフライパス。"長門"の主砲は各個打方，各砲身で広い射角を構成している。







〔左下・下〕96陸攻23型の雷撃訓練。敵艦の対空砲の弾幕をかすめて接敵、この高度で魚雷を放つ。猛訓練につぐ猛訓練。みがきぬかれた日本海軍の雷撃機パイロットは、当時世界一流のウデを誇った。
〔上〕"接敵"のため旋回する96陸攻。下には白い航跡をひいて仮想敵艦"長門"





〔上・下〕これも"長門"を目標に雷撃訓練中の1式陸攻23型。上の写真は攻撃中、下は攻撃を終えて避退するところ。"長門"に積まれている95式水上偵察機の姿がかすかに見えるが、同艦は本機を3機搭載していた。



ボールトンポール デファイアント



2次大戦機 アルバム

後席に機銃4梃の動力砲塔をつけた複座戦闘機——ボールトン・ポール デファイアントは、2次大戦に参加したただ一つの単発複座戦闘機である。

前方の固定機銃が常識であった単発戦闘機のなかで、攻撃火器を後方銃座に集中したデファイアントは、動力砲塔のメーカー ボールトン・ポールならではのユニークな発案であった。しかし速度と格闘力は単座戦闘機の敵でなく、とくに背部の重い砲塔はその機動性をいちじるしくそこなった。

1940年5月に空戦に参加、ダンケルク上空の敵爆撃機の編隊に対して果敢な戦闘をいどみ、65機を葬る戦果をあげたのが本機の戦史に残る唯一の活躍。単座戦闘機との空戦ではその後被害が続出、まもなく昼間の出撃を中止して、夜間戦闘に専念、沿岸警備や標的曳航などの地味な任務に転用された。

〔上・下〕デファイアントの原型1号機（K8310）。動力砲塔を持った単発複座戦闘機という1935年の軍の仕様F9／35には、デファイアントのほか、ホーカーのホットスパーの設計も採用されたが、ハリケーンの生産に追われて開発が遅れ、量産はされなかった。ロールスロイスマーリンI（1,030HP）エンジンを装備した写真の1号機が初飛行したのは1937年8月11日。初飛行では砲塔を装備していなかったが、砲塔をつけてのテスト飛行では、302mph（486km／hr）の最高速度を記録している。





(上)前ページと同じく原型1号機（K8310）であるが、プロペラ・スピナーとエンジン排気管が改造され、胴体下面に無線柱も装備されている。アンチグレア・パネルがついて、グンと戦闘機らしくなった。1号機のテスト飛行では、大きな砲塔を背負っているわりには、安定と操縦性が良く、離陸中に右へ傾くクセがあったが、まずは無難な出来であったという。

(下・右上)1号機につづいて、1939年5月18日に初飛行した原型2号機（K8620）。2号機ではマーリンIIエンジン装備、初めてデファイアントの名称が与えられた。2号機の製造と第1次生産分87機の量産が決ったのは1937年4月であるが、2号機では後方視界のために、後部風防両側に窓をつけ、主脚カバーの改修などをしているので、初飛行は大幅に遅れることになった。





「下」264スコードロンのデファイアントMkI。デファイアントは1938年2月に202機、5月に161機が発注されて、量産も本格的に行なわれるようになった。昼間戦闘機としての本機を装備したのは第264スコードロンで、1939年12月から引渡しを受けて、2個小隊が実動態勢に入ったのは翌40年3月。5月12日にA小隊が初出撃、スピットファイアの援護を受けて、英仏海峡上空でJu87 1機撃墜の初戦果をあげている。翌13日にもB小隊がオランダ海岸上空に進撃、Ju87 4機を撃墜したが、Bf109Eの迎撃を受けて、6機のうち5機が落されるという大きな被害を蒙った。

これ以後デファイアントは、侵攻攻撃が禁止されて、英仏海峡に飛来する敵爆撃機の迎撃任務が与えられることになった。





〔上〕前ページと同じく第264スコードロンのデファイアントMk.I。第264スコードロンのデファイアントは、ダンケルクの戦果を含めて、40年5月末までに65機撃墜の戦果を報告しているが、この栄光もつかのまで、5月31日に大量7機を失ない、その後も消耗がつづいて、8月いっぱいで昼間戦闘機としての任務が解かれることになった。砲塔を持ったデファイアントは、追尾されても、旋回中でも射撃できる利点はあったが、パイロットは空戦中、常に後方射手の攻撃を頭において機を操らなければならなかった。とくに敵戦闘機の前上方と下方からの攻撃にはもろく、この両方からの攻撃に応射するために機をたてなおすのは至難であった。写真上の手前の2機も、40年8月の空戦で撃墜されている。
〔下〕スペシャル・ナイトの夜間戦闘用の塗装にしたMk.IA。第256スコードロンの所属機。同中隊は、1941年初めからデファイアントで出撃。





エアラインの翼

BOAC　英国航空　⑧

〔上〕ＢＯＡＣが1947年末からロンドン－ニューヨークの大西洋路線に飛ばしたボーイング　ストラトクルーザー（ボーイング・モデル377）。C-97（モデル367）の民間型である本機は、らせん階段のついた２階建ての乗客キャビンで、50－100席が配備できた。ＢＯＡＣでは、377-10-32を６機、-10-28を４機、-10-34を６機、-10-26を１機の計17機のストラトクルーザーを購入して、ジェット機時代がスタートする1958年頃まで使っている。写真の機体（G-AKGH）は-10-32の２号機で、のちにアメリカのトランスポート・エアラインに売却された。

〔下〕エンパイア、ボーイング314などの飛行艇時代につづいて登場したロッキードL-149コンステレーション。C-69を民間の旅客機としたL-149は43－48席。つめ込むと、最大60席までの客席が設けられた。ＢＯＡＣでは５機を購入。１号機（G-AHEJ）は、1946年７月１日から新しく開設されたロンドン－ニューヨーク空路の１番機として飛んだ。所要時間は19時間43分。







〔上2枚と下〕サボイア・マルケッテイSM.82カングロ（カンガルー）。SM.82はSM.75輸送機をスケール・アップした軍用爆撃／輸送機。1号機は1938年に飛んでいるが、戦後のイタリア空軍にも装備されて、主力輸送機として1960年頃まで使われていた息のながい飛行機。大戦中に実用化されたイタリアの優秀機の一つである。2次大戦の直前には、8037マイルを56時間30分で飛んで長距離周回飛行記録をたてている。ペイロードは4トン。輸送型は航空発動機6基、完全武装の兵員40名を運ぶことができた。

写真上は半引込み式の爆撃手席がついた爆撃型、写真下は輸送型である。





〔上・下〕フイアットＢＲ.20チコグナ。ＢＲ.20は、２次大戦ではあまり活躍することがなかったが、開戦の頃には 200 機以上も装備しており、海外にもよく知られている中型爆撃機。写真下は胴体を延長、機首も改造したＢＲ.20Mの原型。



〔下〕ＢＲ.20bis.エンジンをフイアットＡ.82-ＲＣ.32（1,250HP）に換装したチコグナの最終型。機首の透明風防部分が多くなりエンジン・ナセルも洗れんされた形のものに改造されている。胴体左右側方にも7.7mm機銃が装備されて、機銃は全部で５挺（12.7mm×３）に増強された。なお、ＢＲ.20は日本でも昭和13年に85機を輸入、イ式重爆撃機として採用している。

